

# テオドール・クルレンツイス 自らのカリスマ性を語る

取材・文・写真 中東生  
Text & photo Shinobu Naka

## 「正統な革命児」として認められた鬼才

現在「カリスマ指揮者」と聞いてまず思い出すのは、テオドール・クルレンツイスであろう。はじめは、「オーケストラを立たせて弾かせる変わり種の指揮者」だった。それが、「エキセントリックな存在だが音楽で納得させる凄腕」に変わっていき、今は「正統な革命児」として認知されるに至った。そのクルレンツイスが、今年のザルツブルク音楽祭に手兵のムジカエテルナを引き連れて初登場する。今までも指揮者として登場したことはあるが、今回任されているプログラムの量は他に類を見ない。

## ザルツブルク音楽祭で 《皇帝ティートの慈悲》

2017年夏のザルツブルク音楽祭最初のオペラとなる、モーツァルト《皇帝ティートの慈悲》のための稽古第1週目を無事終えた6月24日、ザルツブルクの街はずれにある稽古場のパウアカデミーでお話をうかがった。

——以前《ティート》はモーツァルトのオペラの中でいちばん哀しいオペラだと話しておりましたが……。

「それは、革命の時代である1791年に、メタスタジオによって50年以上前に書かれた古い台本を題材にして、民主主義とは対極にある神聖ローマ帝国レオポルト2世が、ボヘミア王に即位するためプラハで行う戴冠式用に作曲しなければならなかったからです。あの天才モーツァルトがお金に困って皇帝のPR作品



欧州ではすでに引く手あまたの売れっ子指揮者となったクルレンツイス。我が国でも、いま急速に注目度とその人気上昇している

を書かざるを得ないという状況。そして、その当時、彼は《魔笛》も「クラリネット協奏曲」も「レクイエム」も抱え、十分な時間もかけられず、圧迫感を感じながら、「自分にはもう将来がない」と予感していたのがうかがえます。このオペラ

には死を感じさせる部分がいくつもあるからです。そんなモーツァルトの心境を考えると哀しくて……。現代で言えば、才能ある作曲家がトランプ大統領のテーマソングを作曲させられるようなものですよ！」

——それで意味が良くわかりました。そのようなオペラをなぜ選んだのですか。

「その無念さを昇華させるために、欠けている魂の部分を、『レクイエム』で補っての上演にしました。そしてやはり、このオペラはオペラ・セリアなので、前の《ドン・ジョヴァンニ》とは違った音色ではあっても、ザルツブルク的な音が必要とするからです」

## 神から与えられたプレゼント

——今回のテーマは「カリスマ指揮者」です。どこからカリスマ人生が始まったのか、幼少時代についてお話ししてくださいませか。ご両親は音楽の先生なのですよ。

「母と叔父がピアノの先生です。音楽学校の建物の中に住んでいたため、物心ついた時には、すでにピアノの音は日常の音でした。4歳でピアノを始めて、作曲もしました。でも、ピアノがあまりにも身近すぎて、生で聴いたオーケストラの音に惹かれ、『その一部に自分もなりた』と、8歳でヴァイオリンを始めました。指揮は18歳で始めたのですが、それは自分が、オーケストラ譜から人とは違うことが読み取れるとわかったからです。皆が同じことを読み取って再現するならば、それは単なるルーティンになってしまうので、人とは違う世界を創り出す意義を感じたからです。でも、指揮を始めてから作曲の時間がなかなか取れないのが残念です」



「ご自身のカリスマ性について、どうお考えですか。」

「ギリシア語の『カリズマ』はプレゼントという意味であるように、すべての人間に与えられている神様からの贈り物だと思います。美味しい料理のカリスマや技術者のカリスマ、  
医者のカリスマなど、**僕に言わせれば、**与えられた才能を花開かせることができれば、すべての人が持っているものだと思います」

「でも例えば、同じように素晴らしい演奏をする指揮者でも、オーラのない指揮者と、スター性が溢れている指揮者がいますよね。ここでは、その後者を「カリスマ」と定義しているのですが……」

「それは、前者は努力して到達した名演で、後者は神から与えられたプレゼントを開花させたので、後者のみにカリスマ性を感じるのです」

「なるほど、ではご自分が「普通とは違う」と気付いたのはいつころですか。」

「4歳のころです。でも、人と違うということは、良いことばかりではなく、まずは孤独がつきまといまいます。自分は周りと融合できていない、と常に感じます。今でも世間からは異端児扱いされていますが、自分ではいたって普通だと思っております、僕に言わせれば、世間の方が変なのですね(笑)」

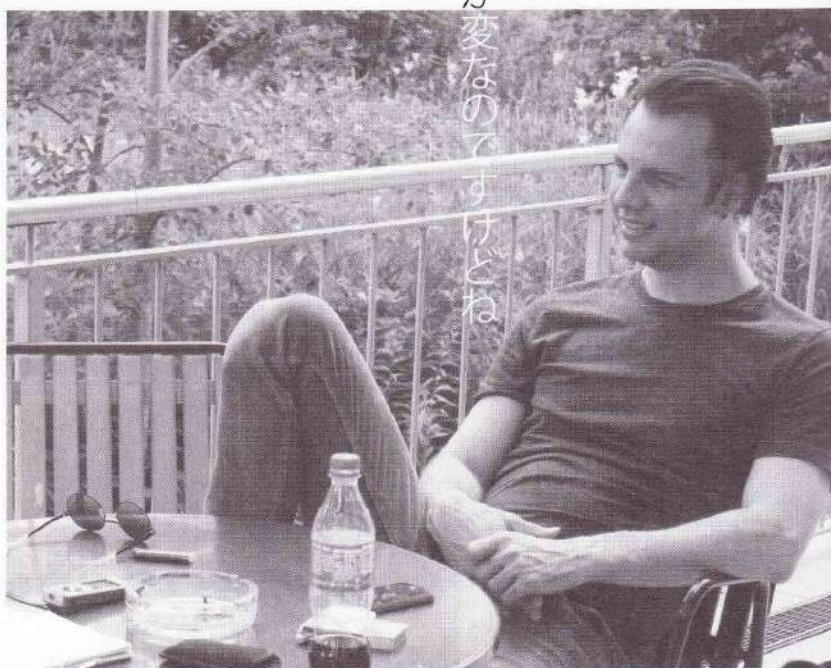
### クルレンツィスの『ミッション』

「いつも多くの仲間にもまれていたお姿からは、孤独など想像し難いですが

……そのように多くの時間を共有して、大切に育てて来られたムジカエテルナ以外に、今回、新たに南西ドイツ放送交響楽団(SWR

**世間の方が**交響楽団)首席指揮者という責務を引き受けたいのはどのような経緯からですか。

「おっしゃる通り、ムジカエテルナで精一杯な状態なのですが、SWRが統廃合する以前から両楽団には客演しており、熱意をもって受け入れられていました。その楽団員たちからの依頼で、彼らが真剣に改革を望んでいると感じられたら、どうして断れましょう。シュトゥットガルト放送交響楽団は、ロジャー・ノルトンの影響でノン・ワイブラートのピュアナ音を持っており、古楽に合う。かたやバーデン・バーデン・フライブルクSWR交響楽団は、ドナウエッシンゲン音楽祭でもわかるように現代音楽に強い。このまったく違う二つの特徴を持つオーケストラが混じり合う際に、適切な改革の方向性を示すのも『ミッションだ』と感じたのです(笑)」「音楽は『ミッションだ』と、前回のインタビューで定義付けていたことに係る。2016年9月号掲載」



インタビューは、クルレンツィスが夏のザルツブルク音楽祭の練習のため、ザルツブルクに滞在中に行われた

#### Profile

1972年、ギリシアのアテネ生まれ。まず母国で音楽を学び、後にサントペテルブルク音楽院でイリヤ・ムーシンに師事。サントペテルブルク・フィルハーモニー管ではユーリ・テミルカーノフのアシスタントを務めた。2004年、ノヴォシビスク国立歌劇場の音楽監督に就任し、アンサンブル・ムジカエテルナおよびムジカエテルナ室内合唱団を創設してその芸術監督に就任。2010年にノヴォシビスク国立歌劇場のポストを退き、2011年からベルミ国立オペラ・バレエ劇場の芸術監督を務める。2018/19年のシーズンからSWR響の首席指揮者に就任。

## Teodor Currentzis speaks about his charismatic

「音楽に必要な世界を創造する」ミッションはこの1年でどんな発展を見せましたか。

「顕著な発展が見られます。まず、我々の劇場ではやっと、自分達の色ですべてのレパートリーを選べるようになりました。今年のディアギレフ音楽祭では後進を育成するラボラトリーがスタートし、来年も世界的アーティストを招いたプログラムが用意されています。フェスティバルが終わっても聴衆がまだ街にいるので、どうしたのかと聞くと、『もう家には帰りたい』と言って引越してくる人達が増えて来ています」

「それこそ狙っていた「ベルミを音楽の首都にする」夢が実現し始めているのですね！日本にいらっしゃる計画はどうですか。」

「やっと2019年に実現します。でもそれまで待たずに日本へ行きたいです。日本人の国民性は世界随一で憧れます。特に日本女性など、内に1000頭の馬を秘め、外は静謐な雰囲気を感じている。そんな日本人が日本でのように生活しているのか、実際に見てみたいのです。そしてできれば、あまり多くない人の前で、中世から脈々と続く音楽のライオンをパフォーマンスできたらいいなあという夢を持っています」